
遊戯王AGX - CliMax Revolution -

ココロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王AGX - Climax Revolution -

【Nコード】

N7063Y

【作者名】

ココロ

【あらすじ】

デュエルアカデミア？闇のデュエル？精霊のカード？デュエルデイスク？ソリッドヴィジョン・システム？伝説の決闘者？「オイ、デュエルしろよ」？何それおいしいの？？

物語の舞台はデュエルアカデミア、現実世界からやってきた一人の少年が、まだ見ぬ敵と立ち向かう！

「…オレはちゃんと帰れるんだろうな？」

答えは訊いてない！

第1話 トリップしてきました的な何か（前書き）

舞台はG Xの世界観ですが、時期をみてシンクロやエクシーズも出したいかと思っています。

それでは、第1話の開幕です。

第1話 トリップしてきました的な何か

ここは童美野町。

言わずもがな、彼の有名なデュエルの町である。

ここは童美野町。

伝説の決闘者^{デュエリスト}、武藤遊戯が生まれて育った伝説の町である。

ここは童美野町。

高橋和希先生による代表作、『遊 戯 王』に登場する、物語の舞台の中心となる町である。

ここは童美野町。

そう、ここはあくまで仮想世界に存在する町であ、

「……もうえーっちゅーの」

そんなモノローグを裏手ツッコミ付きでぶった切ったのは何をかくそうオレである。

どうしてこうなった。

ちゅんちゅん、と、雀の親子の鳴き声を聞きながら、オレははあ、と溜息をついた。

「……………43枚、やっぱり多いか……………」

そう、その日の夜は、自室のベッドの上でデッキの調整をしてたんだ。

明日の休み、友達から久し振りにデュエルのお誘いがあつて、押入れの奥からカードが入ったお気に入りのトランクケースを引っ張り出した。

ところが、所持している6つのデッキが、全部、2011年9月1日新改訂以前のデッキだったため、すべて調整し直さないといけないになっていたのだ。ハリケーン だの、フィッシュボーグ・ガンナー だの、ソーユーのが根こそぎ禁止カードになってたなんて知らなかったぞこの野郎。

おまけに、死者蘇生 や ブラック・ホール は未だに制限とかうん、ないわ。

まあ、先程も述べたハリケーン はオレのデッキでは汎用性が高く、どのデッキにも入っていたけど、それ以外の新禁止カードには然程影響がなく、開いたスロットに準制限化された 光の護封剣 や リビングデッドの呼び声 などを入れるだけで済んだ。

しかし、困ったのは今現在進行形で調整中の6つ目のデッキだ。これはある種、最も色の濃いファンデッキとして構築したものが、それなりに戦えるように自分なりに工夫してあった。ところがこれ

が、フィッシュボーグ・ガンナーが無制限から一気に禁止化してしまったため、完全に弱体化してしまったのである。

くそう、何の嫌がらせだKONAMIよ。

メンタルマスター 同様、まったく予想の範疇を超えた改訂だったため、これは完全に痛手であった。

おお、神よ！シンクロ以外で恵まれない水属性に愛の手を！！

気付いたらそう叫んでいたのはご愛嬌である。

それはそれとして、まあ、愚痴っけていても仕方がないので、3枚投入していたフィッシュボーグ・ガンナーをすべてデッキから外し、その空きに何を入れるかを模索していたわけだが…。

ぶっちゃけ、ムリかもです。

フィッシュボーグ・ガンナーの効果で無理矢理回してたようなデッキだったからなあ…抜くとなると結構荒が目立つ。それに、基本的に低レベルのモンスターのステータスが軒並み低いので、長期戦になると結構キツイ。かといって、短期戦で決着を付けられるほどの爆発力もないし…。

「まいったね、こりゃ」

というわけで、他のデッキより時間をかけて調整を行っているわけだが、どうも上手くいかない。

新エキスパートルールからマスタールールに移行してから、メインデッキの枚数が40枚以上↓40〜60枚、エクストラデッキが0枚以上↓15枚以下、という制約を受けた。

まあ、エクストラデッキの方は問題ない。いじる必要があまりなかったからだ。

むしろ、大問題なのはメインデッキの方だった。

デッキの回転率を考えると、メインデッキは40枚ピッタリがベストである。いかにキーカードを早く引くかが文字通り勝敗のカギ、とも言えるゲームだ。だからこそ、みんな必死になって40枚に押し留めるわけだが…オレはどうもその辺が下手糞のようである。いくらファン要素が強いからって、入れたいカードをあれもこれもとどんどんつつこんでっちゃうのが悪いんだろうな。

「やっぱあと3枚抜こ…」

勝率を上げるならやっぱ調整は時間をかけないと。

さて、どのカードを抜こうか、と、ベッドの上に広げたカードを手に取り始めたそのときである。

どかどかどかどかっ ばったーん!!!

「きーちゃん！大変よたいへーん！」

「親父、カード踏んでる」

「あら、ゴメンなさい。そんなことより、大変なのヨきーちゃん！」

……面倒事が服を着ているときは、大体こういう姿をしているものだ
だとオレはよく知っている。

仕方がない。オレはカードをまとめて“面倒事”の方へ身体ごと向き直った。

「何？親父」

「大変なのヨ！ミルクがないのミルクが！さっきお風呂から上がってコーヒーを飲もうとしたらネ！冷蔵庫にミルクが入ってなかったのヨ！もうおとーさんショーック！なのヨ！」

ちなみにここで言う「ミルク」というのは粉状のクリームパウダーのことだ。

……このクソ親父はミルクごときで。

はぁ、と、人知れずオレの口から溜息がこぼれた。

オレの家は、俗に言う父子家庭である。母親はオレが小学生の頃に病気で亡くなった。まだ小さかったからオレはよく覚えてないが、でも、普段笑顔を絶やさない親父が、母さんの通夜と葬式の間中、号泣していたのはよく覚えている。

その後、親父は再婚せず、男で一つでオレを育ててくれたわけであり、以後、10年以上2人きりで暮らしてきたわけだが。

母さんが死んでから吹っ切れたのか、それとも、もともとそのつもりだったのかは定かではない。

まあ、昔からその気がなかったらやれないだろう。

オカマなんて。

ウチの親父は現在進行形でオカマちゃんだ。馬のように長くごつい顔には、普段は女のようにファンデーションを塗りたくり、目蓋にはマスカラとアイシャドー、頬には明るめのチーク、唇には鮮やかなラメ入りピンク色のグロスを愛用している親父は、どう見ても普通の男には見えない。

今だって、風呂上りだという親父はごつ過ぎる身体にピンク色のフリネグリジェをまとっている。それが気持ち悪い、ではなく、別段何とも思わないのは最早見慣れてしまっているからだろう。

ああ、慣れって恐ろしい。

で、この親父の唯一鬱陶しいところは、どうでもいいことで大騒ぎすることだ。

今回のミルク然り、ちょっと前の騒ぎは確か、「コーヒープレイクのときにいつも食べるクッキーが2切れしかない」だったかな。親父はコーヒーを飲むとき、いつもお気に入りのクッキーを3枚食べるからだ。どうでもいいわ。

「オレがいつもココア飲むときに使ってる低脂肪乳使ったら？」

「イヤよ！お父さんはネ、コーヒーを飲むときは絶対「林永」の「クリップ」がいのヨ！ホラ、昔から言うデシヨ？「クリップを入れないコーヒーなんて」、「コーヒーじゃないのヨ！！」

知らねえよ。

「悪いけど、オレ久し振りのデッキ調整で忙しいから…」

自分で何とかしてくれ、と、くるりと身体の向きを変えようとしたときである。

親父はにっこりと微笑んで、どこからともなく千円札を1枚取り出した。にこにことあくまでもどこまでもにこやかな微笑みのバックには、ふわふわと小さなお花ちゃんが飛んでいる。身長は日本人の平均男性よりも少し高いくらい、大学時代ラグビー部の主将をやっていたという身体付きはごつく、肩幅はオレなんかよりもずつと広い。そんなガタイの頗るいい男が、千円札を片手にくねっ、と身体をくねらせてまるで女がするように小首を傾げてにっこりと笑っているのだ。

かーさん、なんでこんな変な生き物と結婚しちゃったんだよー、と嘆いたのはご愛嬌だ。

「ミルク買いに行ってくれたら、お釣りでカード買ってもいいわよ」
「行ってきます」

速攻魔法のごとき勢いで千円札を引っ掴み、トランクケースと財布、携帯諸々を持ってオレは部屋を出た。

……家を出ようとしたまではよかったんだ。
慌てて靴を履いて、玄関のドアを開けて。

ドアを開けた瞬間、オレは童美野町の公園のど真ん中に立っていた。

……フッ、「扉を開けたらそこは不思議の世界でした」だって？あ
るある、よくあることさ。

……あつてたまるか。

と、脳内で一人ツツコミを入れたところで冒頭に戻る。

「どうしろ、つつんだ……」

そんなツツコミは風とともにさら々と流れた。

T o b e c o n t i n u e d

第1話 トリップしてきました的な何か（後書き）

第1話はさわり程度で。こんな感じでいかがでしょうか？

主人公設定は物語がある程度進んだところで公開しようと思っ
てま
す。

それでは、また次回に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7063y/>

遊戯王AGX - CliMax Revolution -

2011年11月21日10時57分発行